●──東南アジア

言語の習得から始まる関係

宮崎恒二（みやざき・こうじ）
東京外国語大学・理事

地域研究者の軌跡

①生年・出身地……一九五二年、愛媛県

②専門分野・地域……文化人類学、インドネシア、マレーシア

③学歴……国際基督教大学教養学部社会科学科（人類学専攻）卒業、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程（社会人類学専攻）修了、ライデン大学社会科学部ドクトランドゥス課程（文化人類学専攻）修了、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程（社会人類学専攻）単位取得退学、ライデン大学社会科学部博士号（文化人類学専攻）取得

④職歴……東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助手（一九八四年から五年間）、助教授（一九八九年から七年間）、教授（一九九六年から）。この間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長（二〇〇一年から四年間）、国立大学法人東京外国語大学理事兼副学長（二〇〇五年から、二〇〇九年からは理事）。

⑤現地滞在経験……インドネシア（二八歳から二年間、研究員）

⑥研究手法……参与観察、インタビューを用いた現地調査が研究の基本であるが、在地文書も資料として用いる。

⑦所属学会……日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、日本オセアニア学会、Koninklijk Instituut voor Taal, Land- en Volkenkunde

⑧研究上の画期……インドネシアの民主化

⑨推薦図書……ヨセリン＝デ＝ヨング他（宮崎恒二編訳）『オランダ構造人類学』（せりか書房、一九八七年）

メッセージ

（地域）研究者になること

大学在学中、まず文化人類学に関心を抱き、実際に調査対象を選ぶ段階で、インドネシア研究に取り組むようになった。インドネシアを選んだのは、現地調査が可能であること、日本と同様、水稲耕作を主たる生業としつつも、宗教面で日本と異なるイスラームを奉じていることが、関心を惹いたからである。

地域研究という概念を意識し始めるのは一九八〇年代以降であるが、政治研究が中心であり、対象とする社会の視点やそこでの体験が重視されないとの印象を持っていた。

しかし、一九九〇年代以降、文化人類学に限らず、さまざまな分野で、インドネシアなどを対象とする研究者が増え、現地調査も行うようになってきたことから、より広い専門分野をカバーしつつ、対象地域を研究する人々のつながりや共同作業が意味を持つようになってきた。研究者のフォーラムやネットワークとしての地域研究を意識するようになったのは、この頃からである。

地域という概念への注目により、学問分野の重要性が薄れるわけではない。学問分野はどのアスペクトを切り取るか、という視点に関わるものであり、それを欠いては、地域研究は単なる現地に関する知識の集合体に堕してしまう。

コメント

・「地域」について

議論をある程度制限するための概念であり、柔軟に考える方がよい。

・「欧米」について

既存文献や研究者の層に圧倒され、また欧米人自身が自社会を他者の眼にどう映るか、ということにあまり関心を示さないが、フィールドワークによる生活や行動の観察は意外に少ない。ある意味で最後の秘境といえるだろう。

・「フィールドワーク」について

「彼ら」の思考・行動について知ることが重要であり、言語の習得はその一歩である。

・「研究成果の評価」について

研究の評価は、学問分野に基づいてなされるが、大学教育は、学問分野を教え込む方向から、トピック主体に変化しつつある。教育現場では、学問分野、地域、言語能力など、二足、三足のわらじの用意を履ける人材を求めている。

地域研究の魅力と可能性

対象とする地域という「他者」と向きあうのが地域研究であるが、同時に地域研究は異なる学問分野という「他者」と向き合うフォーラムである。